

新学習指導要領で求められる学力及び指導方法の在り方 に関する研究（中間報告）

新しい学習指導要領が告示された。学校現場では、この学習指導要領を正しく理解し、実践に向けての課題を整理することが喫緊の課題となっている。そこで本研究では、学習指導要領の歴史的経緯を踏まえるとともに、新しいキーワードを整理し、各教科の具体的な学力像や指導方法の在り方について研究を進めることにした。また「習得」「活用」「探究」という指導過程の内容とそれらの相互の関係について考えた上で、「習得」「活用」の視点から学習指導要領を見直し、具体的な指導方法の在り方について検討を加えた。

〈検索用キーワード〉 生きる力 キー・コンピテンシー 習得 活用 探究
スパイラルな展開 新学習指導要領

研究会委員

総合教育センター	研究指導主事	稲吉 宣夫
総合教育センター	研究指導主事	坂田 貴仙
総合教育センター	研究指導主事	川澄 誠
総合教育センター	研究指導主事	貝沼 眞幸
総合教育センター	研究指導主事	中神 和也
総合教育センター	研究指導主事	加藤 応子
総合教育センター	研究指導主事	平手ゆり子
総合教育センター	経営研究室長	浅井 厚視（主務者）

1 はじめに

近年の矢継ぎ早な教育改革に、学校現場は右往左往し、流行に乗り遅れまいとして、こぞって新しいものを取り入れようと努力をしてきた。新しい学習指導要領が告示されるたびに思うことだが、教育課程の内容とその指導方法において、連続するものと断絶するもの、何を継続し何を中止にするかを絶えず考えていかねばならないと思う。本研究では学習指導要領の歴史的な経緯を踏まえた上で、キーワードを整理し、新学習指導要領で求められる学力と指導方法の在り方について研究を推進していく。

2 研究の目的

教育基本法が60年ぶりに改正され「教育の目標」（第2条）が規定されたことを受け、学校教育法に義務教育の目標が定められた。ここで示された教育の基本理念は、平成20年3月の新学習指導要領の告示によって明確となり、「生きる力」「確かな学力」の育成が求められている。

そこで当センターでは、今年度所内研究による新学習指導要領についての研究協議会を発足させた。新学習指導要領については、何よりも「最新で」「間違いの少ない」理解を周知ができることを目指した。その上で新学習指導要領の課題や運用について「習得」「活用」の視点からアプローチしていきたいと考えた。

3 研究の方法

- (1) センター所員による所内研究により研究を進める。名城大学教職センターの平山勉准教授より御指導を受け、研究推進の方向性、研究の内容などについて適切な助言をいただく。
- (2) 「学習指導要領の変遷」など歴史的経緯から、新学習指導要領の趣旨と求められる学力について研究を深める。
- (3) 新学習指導要領を考えていく上でキーワードとなっている「生きる力」「確かな学力」「キー・コンピテンシー」などの概念について整理し、理解を深める。
- (4) 各教科の具体的な学力や特記すべき事項について整理する。その上で「習得・活用」の視点から、教育課程の課題や運用について研究を推進する。

4 研究の内容

(1) 学習指導要領の変遷

平成元年度の改訂（小4年度実施 中5年度実施 高6年度実施）では、従来「知識・理解・技能」に対して、副次的に置かれてきた「関心・意欲・態度」を学力の中核に位置付ける「新しい学力観」が強く唱導されることとなった。また、体験的な学習活動が重視され、生活科が新設された。

平成11年度～12年度の改訂（小中14年度実施 高15年度実施）では、詰め込み主義に抗して誕生した「ゆとり教育」の集大成が図られた。その中核として、自ら学び自ら考える「生きる力」の育成を目指して「総合的な学習の時間」が新設された。しかし、改訂されて間もなく、基礎・基本を内容とした学力不足が深刻な問題となり、文部科学大臣による「確かな学力」向上のための緊急アピールが出されることとなった。

この流れを受けて、平成20年3月に告示された改訂（小23年度実施 中24年度実施 高25年度実施）では、「確かな学力」が「生きる力」の中核に位置付けられた。「知識基盤社会」「知のグローバル化が進展する」時代において、知識・技能の習得とそれを活用した思考力・判断力・表現力の育成を重視した教育課程の編成が喫緊の課題となっている。今回の改訂内容はOECD（経済協力開発機構）のDeSeCo（コンピテンシーの定義と選択）プロジェクトのPISA（国際学力、国際学習到達度）調査に影響を受けており、カリキュラム編成の原理が「児童生徒中心」より「教科」の方へ軸が振れ、基礎基本の充実が強く求められる内容となった。

(2) 今回の学習指導要領改訂のキーワード

ア 生きる力

「生きる力」とは「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の三つの力によって構成されている。「確かな学力」は、言語力（言葉の力）・理数教育・伝統文化の継承・体験活動の重視・外国語活動などを内容としている。また「豊かな心」では、内省する力・規範意識などの道徳心・芸術的な感性を育てることが内容となっている。さらに「健やかな体」では、体力の向上・食育の推進・安全に関する指導が行われる。生きる力とは、これらの力の三位一体的な育ちを目指すものである。

イ 確かな学力

「確かな学力」とは、「基礎的・基本的な知識・技能」「知識・技能を活用し、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力」「学習態度・学習意欲」の三つの力の総体である。この力の中核には「言葉の力」があり、「知的活動の基盤となる言葉の力」「コミュニケーションの基盤となる言葉の力」といった二つの力が位置付いている。

確かな学力としては「見える学力」「見えにくい学力」「ほとんど見えない学力」が考えられる。

「見える学力」としては「知る・覚える」といった知識・技能、「見えにくい学力」としては「考える・工夫する」といった思考力、「ほとんど見えない学力」としては「体験する・こだわる」といった「関心・意欲」などに分類することができる。これら「見える学力」の評価として、全国学力学習状況調査のA問題、「見えにくい学力」の評価として全国学力学習状況調査のB問題、「ほとんど見えない学力」の評価としては例えば全国学力学習状況調査の質問紙などが考えられる。(注1)

各教科においては、基礎的・基本的な知識を習得させるとともに、知識・技能を活用する学習活動を行う必要がある。(学校教育法第30条第2項)

ウ キー・コンピテンシー

今回の学習指導要領の改訂に大きな影響を与えたものとしてOECDのDeSeCoプロジェクトが挙げられる。このプロジェクトでは、キー・コンピテンシー(個人が身に付けるべき鍵となる力)を以下のように定義している。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1 相互作用的に道具を用いる能力(社会・文化的、技術的ツール)<ol style="list-style-type: none">① 言語・シンボル・テキストを相互作用的に用いる能力(読解力・数学的リテラシー)② 知識や情報を相互作用的に用いる能力(科学的リテラシー)③ テクノロジーを相互作用的に用いる能力2 異質な集団で交流できる人間関係形成能力(ソーシャルスキル・柔軟な能力)<ol style="list-style-type: none">① 他人と良好な関係をつくる能力② 協力する、チームで働く能力③ 争いを処理し解決する能力3 自律的に活動する能力<ol style="list-style-type: none">① 大きな展望の中で活動する能力② 人生計画や個人的プロジェクトを設計し実行する力③ 自らの権利、利害、限界やニーズを表明する能力(注2) |
|---|

キー・コンピテンシーと「生きる力」は、その目指すものや内容の類似点が多い。キー・コンピテンシーにとっては「批判的思考力」が大切であり、細分化された知識や情報を統合するものである。キー・コンピテンシーでは自律的な活動が、「生きる力」では規範意識などの道徳性が重要とされる点に特徴がある。

(3) 「習得」「活用」「探究」について

新学習指導要領の分析を「習得」「活用」「探究」の三つのキーワードを基に行うことにする。これらは、教師が指導を進めるプロセス、指導過程(子供の側からは学習過程)を意味する言葉と考える。

本研究ではこの三つの言葉を峻別するつもりはない。これらの言葉はお互い重なり、補い合い、双方向性をもつ言葉であると考え。その上で、「習得」とは基礎的・基本的な知識・技能を身に付けるように、反復練習を中心にして指導を進めることであり、また、「活用」とは習得した基礎的な知識・

技能を実際に用いて課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力・その他の能力をはぐくむことと定義したい。さらに「探究」は教科で身に付けた「習得」「活用」の力を基にして、教科の発展学習や総合的な学習の時間で、問題（課題）を見付け、見通し、解決していく力を目指すものである。これは「わからないところ」から「わからないところ」へと学習を展開する問題（課題）解決学習能力であり、自己の学びや生き方を振り返る力を身に付けるための学習と考えたい。

当然「活用」することによって、基礎的な知識・技能を「習得」することもありうるし、「探究」の中で「活用」「習得」の力を身に付けることもありうる。しかし、新学習指導要領がねらっている「活用」は、従来体験的イベント的に偏っていた総合的な学習を教科の力を基にした質の高い探究活動にしていくための力であり、教科横断的・教科発展的な総合の在り方を目指す力と考える。（注3）

（4）「習得」と「活用」の関係と指導方法の在り方

さて今年度の研究では、「習得」「活用」の関係について考えを深めることができた。これに基づく具体的な学習活動を考えていかねばならないと考えている。

「習得」は知識や技能を身に付けることであり、覚えることであるが、覚えたことや身に付けたことを活用までできて、はじめて習得したと言えるのかもしれない。

「活用」は「書く」「考える」「話す」「説明する」「聴く」場面で、身に付けた知識や技能を使い、思考力・判断力・表現力を働かせることである。

「習得」と「活用」との関係について次の三つのかかわりがあると考えられる。

第一に、「習得」と「活用」が単に「習得」から「活用」へと一方向だけに高まるのではなく、スパイラルに「習得」から「活用」へ、さらに「習得」へと行きつ戻りつ、らせん階段を登っていくような高まりがある学習活動の展開を考えた。

小学校4年生の社会科で都道府県の名前と位置を暗記する。この知識を活用して、5年生の日本の農業の学習では、日本地図のみかんやりんごの生産高の多い都道府県に色を塗る。時にはフリーハンドで日本地図をかいたものを使用してもよい。色を塗った地図を見て、日本の農業の傾向や特色について自分の言葉でまとめてみる。この知識を覚え、次の水産業の学習ではこれを活用して、日本の水産業の特色や工夫について予想をたてるのである。こういった学習活動の展開を「習得」と「活用」とのスパイラルな展開と呼ぶことにした。

第二に、「習得」と「活用」とを分けることになじまない教科があることが分かった。そういった教科では学習活動を展開する中で、知らず知らずのうちに知識・技能の習得が図られるのである。「活用」の中で「習得」が行われると言った方が正しいのかもしれない。

小学校1年生の音楽科「曲の中からおもしろい音を見つけよう」では、教材曲を鑑賞した後で、身近にある楽器などを用いて、聴き取った音を探したり、作ったりする活動を行う。曲の雰囲気や変化に合わせて、身体を動かしたり、言葉で発表したりする。このような活動を通して、音を見付ける知識や技能さらに思考力や表現力を育てるのである。これは、特に図工・美術、体育・保健体育、技術・家庭、生活科などに多く見られ、「活用」から「習得」への逆向きの展開と呼ぶことができる。

第三として、「習得」した知識技能を「活用」する場面では、教科の学習場面ではおさまらず、総合的な学習の時間やさらに日常生活で使用されることがある。教科の発展学習や総合的な学習の時間さらに日常生活の実践を通して、つまり「探究」の段階で、再び知識技能の「習得」が図られ、思考力・判断力・表現力などの活用する力が身に付く展開である。

小学校6年生の総合的な学習の時間で、「ふるさと学習」を行い、郷土の人物について各自がテーマ

をもって探究する。この学習で一人調べをしたり、発表のためのポスターを制作したりするためには、資料を活用する力・文を書き表す力・説明など発表する力が必要となってくる。また社会科の歴史の知識があった方がまとめやすいだろう。このように「探究」活動を展開することで多くの知識を「習得」し、様々なことを考え、表現し、妥当な結論を導く「活用」を行い、能動的な知性が養われる学習展開が考えられる。

(5) 算数・数学における「活用」

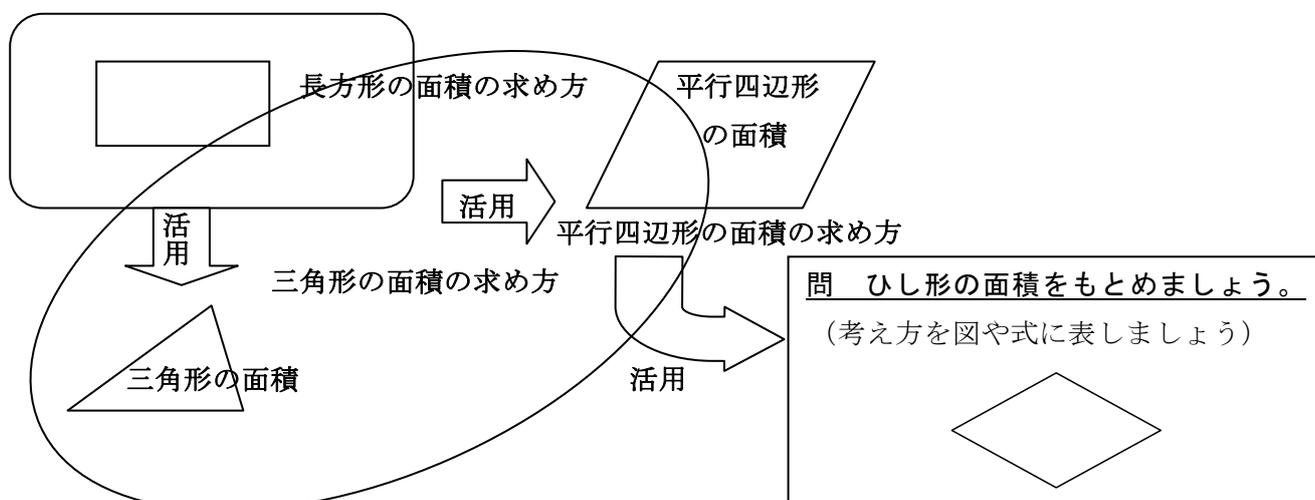
算数・数学では、活用を四つの学習活動に分けて考える。

- ・系統的な内容をつなぎ、新たな知識・技能を生み出す活動
- ・数学の応用，発展的な課題を解決する活動
- ・生活の中にある課題を解決する活動
- ・言葉や数，式，図などを用いて数学的に表現し合うコミュニケーション活動

「系統的な内容をつなぎ、新たな知識・技術を生み出す活動」「数学の応用，発展的な課題を解決する活動」の例として、小学校5年生「面積の求め方を考えよう」を挙げる。長方形の面積の公式を習得する。この知識を基に、三角形や平行四辺形の面積の求め方を考える。これらの求め方の学習活動や知識として習得した三角形・平行四辺形の面積の公式を活用してひし形の面積の求め方を考える。このように習得した知識を活用することで、新たな知識の習得ができ、さらに次の活用へとスパイラルに展開していく。

5年生 算数科「面積の求め方を考えよう」の例

活用と新たな知識の習得



【習得した平行四辺形・三角形の面積の求め方を利用して「ひし形の面積」を求める活動】

(6) 理科における「活用」

理科では「活用」の学習展開として次の二つを考える。

- ・学習した基礎的，基本的な知識・技能を基にして「論述や記述」「比較や関連付け」などの各種技能を用いて「思考力・判断力・表現力」などの力を育成する学習活動
- ・日常生活にある科学的な事象を見つめ直すことができる学習活動

小学校6年生「てこの規則性」の学習では、「支点・力点・作用点」についての知識を習得し、導き出したきまりを分かりやすく説明できるようにする。その後「てこの規則性」を知識だけに終わらせないで、身の回りにある「てこのはたらき」を利用した道具に目を向けさせる。「支点から作用点ま

での距離が近いと軽く感じる」など実感を伴った理解をねらいとしている。

第6学年「てこの規則性」の単元の学習活動の例 「習得」「活用」のスパイラルな展開

習 得	活 用
<p>(3) てこの規則性</p> <p>[科学用語]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 支点, 力点, 作用点 <p>[科学的な考え方]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 水平につり合った棒の支点から等距離にもものをつるして棒が水平になったとき, ものの重さは等しい。 <p>[実験の技能]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 上皿てんびんの使い方 <p>[科学的な考え方]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 力を加える位置や力の大きさを変えると, てこを傾ける働きが変わり, てこがつり合うときにはそれらの間に<u>規則性</u>がある。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>おもりがぼうを傾ける働き =おもりの重さ×支点からの距離</p> </div>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 力点を変えたてこを体感する実験結果を比較し, 規則性を推論する。 ・ てこ実験器を使用して, おもりの個数や支点からの距離を変えて(条件制御する), 規則性を導き出す。 ・ 学習したてこの規則性と比較して, 身の回りのてこを利用した道具を探す。 <☆実生活・実社会との関連>

<授業の一場面>

「身の回りにあるてこ」

○ 身の回りにはどんなてこがあるかな？

- ・ 支点, 作用点の意味
- ・ 支点から作用点までの距離が近いと軽く感じる。

**思考技能
の活用**

小さな力で重いものを動かすなどの視点で身の回りの道具を観察し, 推論する。

<☆日常生活との関連を知る活用>

つめきり, はさみなどてこの働きのある道具を見付ける。

**表現技能
の活用**

- ・ 見付けたものを図示し, 支点・作用点・力点を書き示す。(図表による表現力の活用)

てこの働きについて分かったことを, まとめる発表する。

**思考技能
の活用**

- ・ 友達の見付けたものと自分の見付けたものとを比較する。

調べたことを発表する。

- ・ ポスターセッションやワークショップなどにより発表する。(論述の活用)

(7) 「新学習指導要領に関する実態調査」の結果から

センター発表会の当日、第1研究協議会の参加者を対象として、新学習指導要領に関する実態調査を実施した。90名の参加者の内、67名から回答があった。回答者の勤務先は、小学校29名、中学校20名、県立学校6名、県及び市町村の教育委員会12名である。内、小学校では13名、中学校では9名が教務主任の仕事を担当している。

小・中学校に勤務する参加者に「新学習指導要領の『習得』『活用』を意識した授業改善に取り組んでいるか」と質問したところ、小学校では29名中6名が、中学校では20名中8名がすでに授業改善に取り組んでいると回答した。

また「『習得』『活用』を意識した授業改善を進める場合、貴方は現在の授業のどの点を改善していきますか」との問いに対して、学校に勤務する55名から回答を得た。(複数回答可とした)資料1の

【資料1 第1研究協議会参加者の実態調査】

項目	計
子供の見方・とらえ方	20
教材開発	17
単元等の指導計画	20
話し合い場面	24
発表場面	19
報告・学習のまとめの場面	6
資料(図表文)の読み取り場面	6
一人調べの場面	2
学習の振り返り(シェアリング)	20
学級集団作り	10
学級づくり全般	3
計(複数回答可)	147

ような結果となった。今回の学習指導要領の改訂に伴い、「子供の見方・とらえ方」「教材開発」「単元等の指導計画」など授業改善を進めていく上で、基本的な枠組の変更を考えている人が多いことに気付く。授業づくりの基本に、今一度立ち返れということであらうか。

また「話し合い場面」「発表場面」「学習の振り返り場面(シェアリング)」など、学習プロセスを大切にしていこうと考えている参加者が多い。「習得」「活用」「探究」を意識するというのは、今までも大切だと言われたり、考えられたりしながらじっくりと取り組むことのできなかつた「書く」「資料を読み取る」「考える」「発表する」「説明する」「まとめる」といった学習活動を大切にしていこうと考えているのではなかろうか。個々の学習プロセスを見直し、

「教材」「発問」といった授業研究を進めていく必要があると思われる。

5 研究のまとめと今後の課題

研究の成果として、以下の2点を挙げることにする。

- (1) 新学習指導要領で求められる学力である「生きる力」「確かな学力」について、歴史的な経緯を踏まえて検討することができた。また、新学習指導要領の趣旨についても明らかにすることができ、「最新で」「間違いの少ない」理解を周知することができた。
- (2) 各教科の具体的な目標や内容について整理することができ、「習得」「活用」の視点から指導方法の在り方について研究をしていくことの大切さに言及することができた。

今後の課題としては、学習課題を解決するための「活用」の具体的な指導方法とそれにかかわる現職研修の在り方について考察を進めていきたい。

(注1) 梶田叡一「新学習指導要領がめざすもの」(『指導と評価 2008年5月号』図書文化)

(注2) ドミニク・ライオン、ローラ・サリカニク『キー・コンピテンシー』(明石書店)

(注3) 安彦英彦「いま、なぜ『活用力』なのか」(図書文化『活用力を育てる授業の考え方と実践』)